



心をつなぐ、 あったか朝市

～溝口町朝市グループ～

幡井明日香

六月のある日、私は溝口町朝市グループの方々にお会いするため鳥取県伯耆町を訪れました。伯耆町は二〇〇五年に岸本町と溝口町が合併してできた町で、大山西側のすそ野に広がる自然に囲まれた素晴らしい所です。

私は今回、鳥取西部の農産物直売所を取り上げたいと思い候補を探していましたが、その時、『のんびり雲』第四号（二〇一〇年）の「街のおもしろ文化観察学入門⑤米子編」という記事の中で、溝口町朝市グループの皆さんが紹介されているのを見つけ、取材させていたかどうかと決めました。第四号には「とてもノリがいい方々で、楽しくお話させていただけました」と書いてありましたが、実際にお会いして思ったことは、とにかく皆さんが元氣だということ、常に笑顔で楽しそうだということでした。

朝市グループって何？

取材先を溝口町の朝市グループと決めたところまでは良かったのですが、なにか相手は一般の農家の方。どうやって連絡を取ればいいのか分かりません。そこでJA鳥取西部溝口支所に問い合わせしてみました。すると、ありがたいことに溝口支所が仲介してくださることになり、お会いする場所も溝口支所ということになりました。

取材当日、支所に着くと五名の方が会議室で待っていてくださいました。会長さんだけがいらっしやると思っていたの



■(左上)JA溝口支所前で朝市グループの皆さんと記念写真。(右上)朝市グループ会長の中島照子さん。(下)記念誌の説明をして頂いている様子。

で、五名も来ていただけたのには本当に驚きました。皆さんが楽しそうに会話をしているらしいややかなムードの中で、自然と取材が始まりました。

朝市グループはJA鳥取西部女性会溝口支部の中の一つの組織です。女性会には朝市グループのほかに加工グループの会、カトレアの会(草木染め)、かざぐるまの会(福祉ボランティア)という三つのグループがあります。女性会は昭和五十九年に当時農協職員として働いていた入江恭子さんをリーダーとして立ち上

分程に減ってしまいました。

土曜の朝は米子本通り商店街へ

朝市は昭和六十三年に始まりました。今年が二十六年目になります。現在は五月の第二土曜日から十二月の終わりまで毎週土曜日に行われています。お盆前の市は「盆市」「花市」、十二月最後の市は「止め市」と呼ばれています。

土曜日の朝はまず、JA溝口支所の前に品物を持ち寄り「目合わせ」を行います。「目合わせ」というのは誰が何をど

がり、創立二十五周年を迎えた平成二十一年には記念誌も刊行するほど活動的な団体です。

朝市グループの現在の会長は中島照子さんという、女性会の役員を長い間やってこられた方です。最近足元の具合が良くないようですが、グループのメンバーの期待に応えて会長さんとして頑張っているらしいです。

朝市グループは現在十六人のメンバーで活動しています。以前は三十人以上で活動していたのですが、高齢でやめていられる方や亡くなる方もあり、今では昔の半

れだけ出荷したかを確認する作業です。その後、午前七時から一時間程度、溝口駅前まで野菜や花を販売します。これが終わると米子市の本通り商店街に商品を持って移動し、午前九時から午後一時ごろまで市を開くというスタイルで行われています。

米子での朝市は、NTTから「米子の街の活性化のために協力を！」と頼まれて始まりました。NTTが空き地にテナントを張ってくれたりして、とても良い条件で始まったそうです。この頃は一度で三十万円もの売り上げがあり、中心市街地も今より賑わっていて、とても楽しかったです。朝市はNTT前で五、六年ほど続けた後、別の場所に移ります。

二か所目は本通り商店街のアーケード内、当時は鳥取銀行だった建物(現在はドドドというカフェレストラン)の前です。商店街の側も活性化につながるため、とても協力的で、朝市グループ側

も商店街側も双方が喜ぶ結果となりました。

現在朝市が行われている三か所目は同じ本通り商店街のアーケード内ですが、二か所目より少し駅側の吉田金物屋の前です。

大山が育むおいしい野菜

朝市で売られている野菜は、旬のものであればほとんどのものがあります。と



■(左上)パセリを収穫中。(右上)ハウスへと続く農道。(左下)もぎたてのトマトを持った遠藤美鈴さん。(右下)野菜の葉が青々と茂る遠藤さんの畑。



■(左上) 荷物を預けてお墓参りへ。(右上) カゴいっぱい野菜を買われたお客さん。(中段) 左からあじうり、白いゴーヤ、あじさい、黄色いスイカ。(左下) 販売されている色とりどりの花。(右下) 商品を丁寧に梱包。

んからのリクエストが入るほどの人気商品となっています。

溝口は昼夜の気温差が大きいことから、野菜はおいしく良質なものに育ち、花は色が濃くて長持ちすると評判が良いそうです。とっとり花回廊からJAに注文が来て、溝口の花が花回廊に出荷されているというお話もありました。また、朝市グループの方々のほとんどは日野川より大山側なので、米は大山の雪解け水のおかげで特別おいしいとおっしゃっていました。

女性会朝市グループは地産地消の活動にも一役買っています。平成三年からは地域の保育所に野菜を届ける活動を始め、平成四年からは小学校などで提供される学校給食にも朝市グループの方々がつくられた野菜が使われています。

女性のパワー

そもそも朝市は女性たちのお小遣い稼ぎ感覚で始まったそうです。それまで農家の嫁は自分が自由に使えるお金などなかったため、朝市で野菜を売ったお金が自分の口座に入っ

ですが、女性会では課題も見えてきています。若い人が加入するということがめったにないのです。朝市グループ会員の最高齢の方は八十六歳、最も若い方も六十前という状況です。結成時は四十

歳ぐらいが中心だったメンバーが年を取り、平均年齢は徐々に高くなってきています。最後の加入者は三年前で、それ以降は勧誘を続けてはいるものの、入ってきてくれる方はいません。

現代の日本では女性も社会進出が進み、会社員として働きに出る人が多く、朝市グループの皆さんは「きれいな格好して働いていた人は土をかまうことをしない」とおっしゃっていました。また、米子での販売が当番制であるため、それを負担に感じるといふこともあるのだそうです。「実際にやってみると楽しいのにおっしゃっていました。

やっぱり対面式じゃなきゃ

最近道の駅などに併設されている農産物直売所が多い中、溝口町朝市グループの皆さんは、「対面式で販売することが楽しいのに。吸収されるくらいならやらない」と一言。

私は道の駅のような複合施設で販売するほうが効率的で儲かるのではないかと思っていたのですが、「吸収される」という表現からして、皆さん、あまり良いイメージを抱いていらっしゃらない様子でした。

大切なのはお金を儲けることだけでは

ても種類が豊富です。朝市グループのメンバーの畑ではたくさんの種類の野菜が作られているからです。また、溝口は大山のすそ野にあるため、朝市グループの方々がそれぞれが所有しているらしい畑の標高が違います。高い所は標高四五〇

メートルもあります。そのため各作物が時期を少しずつずらしながら生産できるので、出荷期間を引き延ばすことができます。春には山に山菜を採りに出かけてます。ぜんまい、ふき、わらびなどは、お客さ



■この日の朝市当番の一人である永井恵美子さんとお話。

なく、ごひいきの方とお話をするこゝや、メンバーでわいわいと楽しみながら販売するという「心のつながり」だと気付きました。

野菜のおいしさにびっくり

朝市グループの皆さんとお話を終え、メンバーの一人、遠藤美鈴さんの畑に連れて行っていただくことになりました。大山方面にしばらく車を走らせると、徐々に、日野川沿いの標高が低い所にあったJA支所付近とは雰囲気が変わってきました。そして標高三五〇メートル付近にある畑に到着。

畑には様々な野菜が植えられ、青々と茂る野菜の葉で地面が覆い隠されています。

した。この地域の土壌は大山の火山灰からなる肥沃な黒ボク土で、品質の良い、立派な野菜が作れるそうです。

ハウスにも連れて行っていただきました。ハウスではキュウリやトマト、メロンなどが栽培されていました。畑でなっているのを初めて見る野菜もありました。もぎたてのトマトをいただいてその場で食べたのですが、これまでに食べたトマトとは全く別物でした。完熟トマトはこんなにも美味しいのかと衝撃を受けました。

ハウスの外にはパセリが植わっていて、これもいただいて食べてみました。これまでパセリは料理の飾りだと思っあまり食べなかつたのですが、今回初めてパセリを美味しいと感じました。

あつたかい気持ちになれる

後日、私は米子の本通り商店街で行われている朝市を二度訪れました。九時から始まるということだったので一度目は九時すぎに行つたのですが、お客さんの波が引いてしまった後のようで、「もっと早い時間に来なければ」と思い、もう一度出掛けることにしました。

二度目は八時半すぎに行つたのですが、まだ準備中で、しかも外は激しい雨にもかかわらず、すでにお客さんで賑わっていて、なんと八時四十五分には第一波が引いてしまいました。朝市を楽しみにしていて、時間より早く来る常連さんがたくさんいるのです。



■(上)ワイパーで雨水をかいて下さる商店街の方。(下)商店街の方が用意してくださった椅子。

この日は夏野菜が増えてきたため普段の二倍の量の野菜があり、野菜が入っているトレーが約六十個並べられています。軽トララック二台とワゴン車二台の、計四台で運ばなければならぬほど大量だったそうです。

お客さんは次々とやってきて地面に丁寧に並べられた野菜を品定めしては買っていくお客さんたち。まるで業者の方かと思っほど、カゴいっぱいになるほど野菜を入れて買っていかれる方もおられました。

しばらく見ているうちに、私はその場がただの商売の場ではないことに気付きました。お客さんと朝市グループの方の会話を聞いてみると、「この野菜の調理法はどうしたらいいの？」という声や「こ

のストール素敵だね！」という会話が聞こえてきます。「これからお墓参りに行くから買った野菜を預かっておいて」と言っ荷物を預けるおばあさんもおられました。

また、商店街でお店を営んでいる方々の協力も見逃せません。朝市グループの女性たちが座るための椅子を貸してくれたり、「お茶しよう」と店に招き入れてくれたり、雨で濡れて滑りやすくなった路面をワイパーで掃除してくれたり、商店街の皆さんも朝市を行う上で大きな力となっています。こういった地域の方とのふれあいの楽しみも朝市が長く続いている理由かなと思っました。

人と人が心を通わせ、あつたかい雰囲気漂うこの朝市が、これからもずっと続くことを願っています。
(はたい・あすか／文化資源学系二年生)



ひとと**絵本**の縁をつなぐ えほんやとこちゃん

(米子市)

木村香織

絵本と児童書の専門店、知る人ぞ知る絵本屋さんがこの山陰にもあります。お店の名前は「えほんやとこちゃん」(以下「とこちゃん」と略)、鳥取県米子市東町にあります。

米子市駅前イオンから北に約二百メートル行くと、絵本屋さんというより、小さな隠れ家を思わせるような「とこちゃん」が見えてきます。オーナーを務めるのは高橋素子さん(60)。今年還暦とは本当に思えないほどパワフルで、よく笑いやよく喋りよく動きます。高橋さんがそこにいるだけで辺りがぱっと明るくなる、そんな魅力を持った方でした。

「とこちゃん」という絵本屋の名前は、かこさとしさんの『とこちゃんはどこ』という絵本の名前からです。どうしてこの絵本からなのか尋ねると、「三人の子どもみんなが、『とこちゃんはどこ』が一番面白かったっていうのよ。だからお店の名前もそこからだろうと思って」と、高橋さんははにかみながら答えてくださいました。

絵本専門店「とこちゃん」

実はわたしも米子市出身で、小さいころにこの「とこちゃん」によく通っていました。今回取材で十年ぶりに行きましたが、店内の様子は当時とまったく変わっておらず、とても懐かしく感じました。

店内には、絵本、児童書といった本だけでなく、『11びきのねこ』や『わた



■店内には素敵な本の展示や、休憩スペースがあります。書架は本の高さに合わせて棚の高さが変えられるつくりになっています。

しのワンピース』のキャラクターのキーホルダーや人形、子育てに関する大人向けの本も販売してあります。

奥に進むと六人掛けのテーブルがあり、お客さんと本についてゆっくりおしゃべりできるスペースがあります。また、子どもたちが遊べるように、木馬や木の家といったおもちゃが置いてあるスペースもあり、敷き物が引いてあるので赤ちゃんが眠たくなくても安心です！

「とこちゃん」では、毎月第四日曜日、

午後二時からおはなし会がおこなわれます。高橋さん選りすぐりの絵本の読み聞かせや、ストーリーテリングをおこないます。他にも、保育士さんたちと一緒に勉強する（一般参加もOK!）「ずくぼんじよの会」や、学校司書さんと本について語り合う「ブックトークの会」もおこなわれています。

「ずくぼんじよの会」は、主にわらべ歌と絵本についてテキストを使って勉強をしています。今は『子どもへのまなざ

し』という本を使って勉強しており、子どもにとつての絵本の大切さを再確認する場でもあります。

「ブックトークの会」は、人に本を伝えるときの技術を磨くことを目標に活動しています。ブックトークの会で多くの本を知り、ブックトークを深め、本の魅力をどう伝えていくかを、会を通して勉強しています。

毎月発行される「えほんやとこちゃんたより」には、季節に合った詩やわらべ歌、おすすめの本、大人のためのおすすめの本が載っていて、素敵な本や言葉と出会う手助けをしてくれます。それだけではなく、高橋さん自作の素敵な絵と、なおちゃんというお孫さんの成長も、「なおちゃん日記」で逐一報告されています。

絵本との出会い

高橋さんは、生まれも育ちも石川県。もともとは中学校の数学の教師をしていましたが、結婚・出産を機に鳥取にやってきました。「自分の意思とは関係なしに住んだけど、今は知り合いがいっぱい！」。そう言って高橋さんは笑います。

絵本屋さんをするくらいだから、「子どものころから絵本が好きだったのかな？」と思いきや、高橋さんは五人兄弟の末っ子で、読む本といったら、姉の雑誌の付録に読んでいた読み物や、父親の持っている小難しい小説など、小さい頃はあまり絵本に触れてこなかったそうです。絵本に興味を持つようになったのは、



結婚後娘さんが生まれ、子育てをするようになってから。はじめは自分の子どものために絵本を集めていましたが、それだけでは勿体ないと感じ、一九八五年に、集めた絵本や児童書を地域の子どもたちに開放する、家庭文庫「なかよし文庫」をオープンしました。

仲間たちとのボランティア

「なかよし文庫」を主催してから十年後の一九九五年に、高橋さんは2つのボランティア・サークル、「成美絵本の会」と「おはなしグループだくちる」を仲間とともに開始しました。きっかけは土曜日に学校が休みになって「何かしようかな」という考えからでした。そこから、二十数名の友人たちで「成美絵本の会」



をスタートさせます。活動の内容は、第二土曜日の午前中に、公民館で読み聞かせ活動をおこなうというものでした。

「おはなしグループだくちる」は、小学校に仲間と3人で読み聞かせボランティアに行つた際、「このグループの名前は何かですか？」と聞かれたことから始まりました。「成美絵本の会」は地区でおこなわれるのに対し、「おはなしグループだくちる」は、児童文化センターを拠点にして、読み聞かせやストーリーテリングをしたい！という人がいるんな地区から集まつてできています。

家庭文庫「なかよし文庫」は解散してしまいましたが、「成美絵本の会」と「おはなしグループだくちる」は、現在でも活動がおこなわれています。

「とこちゃん」始動!

「とこちゃん」がオープンしたのは、読み聞かせボランティアを開始してから四年後、一九九九年十一月三日、文化の日です。「誰かについて行くんじゃないかと、自分でするのが好きみたい」と、「なかよし文庫」も読み聞かせグループも、先陣をきつて引つ張つてきた高橋さん。とうとう絵本屋さんをスタートさせました。

開店初日は「人が来るかな？」と心配だったそうですが、高橋さんの人脈は、読み聞かせ活動を通して、既に広範囲に広がっています。「松江からも米子からも、友達がいっぱい来てくれた!」と嬉

しそうに語ってくださいました。

とこちゃんのお店に置く絵本は、

- ①物語が面白い
- ②文章、絵が優れている
- ③物語に合う暖かい絵

ということを基準に選書しているそうです。そのため高橋さんは、次々と出版される絵本や児童書を月に何十冊も読んでいます。

あるとき、とこちゃんに来た親子に、「ここにある本は、おぼちゃんが全部読んで選んでいるのよ」と言ったら、後日、子どもだけが来て、「おぼちゃん、この本の内容は？」と尋ねました。高橋さんが答えると、「じゃあこの本は?」。答えると、「じゃあこれは?」の繰り返し。どうしたのかと疑問に思っていると、「おぼちゃんが、本を全部読んでいるついでから、本当か確かめに来たの」とその子が言ったそうです。

「無害なことは嘘がまかり通つてもいい。でも、本質的なところは絶対に嘘をついちゃいけない」。高橋さんはそう言っています。子どもは、聞いていないように見えても、ちゃんと人の話を聞いています。だから、特に子どもには嘘をついてはいけません。じつと純粋なまなざしで、こちらの話をちゃんと聞いていますからね。

読み聞かせの精神

現在わたしたちは、鳥根県立短大で子どもたちに読み聞かせをおこなうゼミナール



に所属しています。そのゼミの名前は「おはなしゼミ」といい、これまでに何度も絵本の読み聞かせをおこなってきています。そんなわたしに、読み聞かせのプロともいえる高橋さんが、こんなことを話してくださいました。

「絵本は、五割は選ぶ本にかかっていくけど、二割は読み方で、あとの三割は熱意なの。だから読み聞かせは、自分が好きで、自分が楽しめる本を読みなさい。そうしたら子どもも、自然と喜んでくれるから」。

絵本を選ぶ親御さんも、「どんな本を選んだらいいのですか?」と高橋さんによく聞いてこられるそうです。そんなとき、高橋さんは、途中まで一緒に本を選びますが、最後は、「あなたが読んで一番面白い本を選んでください」と言うそうです。自分が面白いと思える本を読めば、自然と熱意はこもります。自分が面白いと思つて選んだ本は、最高の絵本なのです。

「とこちゃん」が毎月発行している「えほんやとこちゃんたより」にも、高橋さんはこんな言葉を書いておられました。「絵本は声に出して読んでください。使

■店内の隅には、高橋さんお気に入りの絵本たちが。



■(上) 絵本を読み聞かせてくださる高橋さん。(下) 店内には懐かしい絵本がいっぱい!

いたくなる素敵な言葉に出会えます。何度見ても発見のある絵に出会えます。そして心の深いところを揺さぶる物語に出会えます」(第一三四号より)

絵本とストーリーテリング

読み聞かせには、絵本を使っておこなう読み聞かせと、絵本を使わず、口頭だけでおこなうものがあります。後者をストーリーテリングといい、一つのお話を丸暗記して、自分の言葉だけで子どもたちに物語を語るのです。ストーリーテリングは、子どもたちの想像力で自由に物語に絵をつけることができます。

ある日、二十代後半くらいの男の方が「とこちゃん」に来て、マリー・ホール・エッツの『もりのなか』という絵本を見

て、「懐かしいですね!」と手に取りました。そしてページをめくっていくうちに……、「あれっ? これって色がついていませんでしたっけ?」と尋ねたそうです。『もりのなか』は一色刷りの絵本で、黒以外の色は一色もついていません。「きつと彼が小さい頃は、無意識に自分で色をつけていたのね。それだけ小さい子は、脳をフル回転させて絵本を読んでいるのよ。子どもたちは絵本の中でたくさんのお話を経験して、たくさんのお話を学ぶの」。

絵本だけでもこんなに想像力が働くのに、一人ひとりの頭の中で物語の絵を想像するストーリーテリングは、どれだけ想像が掻き立てられることでしょう。

「絵本もストーリーテリングも両方楽

しい!」と言いつつ、ご自身も楽しみながらいきいきと話をしてくださる高橋さんだからこそ、何十倍も楽しくお話を聞くことができるのです。

本と人との出会い

『とこちゃん』や読み聞かせをしていると、様々な人との出会いがある。それが面白いのよ! 十三年しているけれど、本当にあつという間だったわ。でも、昔『とこちゃん』に来ていた子(わたし)が、こうやって大学生になって取材に来るのは面白いわね。」

そう語ってくださった高橋さん。島根県立短大の絵本専門図書館「おはなしレストラン」も開設の際、選書や絵本の読み聞かせの仕方を高橋さんに助言してもらいました。「とこちゃん」で絵本を買っていただいたのは、現在その大学で読み聞かせ活動をおこなっています。これも絵本屋さんに関連して行ってくれた母がいたからだし、米子に絵本専門店「とこちゃん」があったからかな、と不思議な縁を感じています。

「わたし、百十歳まで生きるから!」と、これは高橋さんの冗談なのですが、ストーリーテリングや読み聞かせをする人は長生きされる方が多いそうです。「やっぱり、いろんな子を見守りたいからね」。そんな思いがあるからこそ、高橋さんはこの三十年間ずっと、絵本に関わり、人に関わり、いつでも第一線で活動してこられました。「物やお金は他人に取ら

れることはあるけど、自分の身についたものだけは誰にも取られないのよ」と、高橋さんは笑顔で語ってくださいました。

絵本は子どもも大人も楽しんで読むからこそ、本当の力を発揮するのです。わたしも現在、読み聞かせの活動をしています。短大を卒業してからも、高橋さんのように絵本に関わり続けていきたいな、と思います。

あなたも選りすぐりの物語を、「とこちゃん」で見つけてみませんか? 「とこちゃん」の扉を開けば、きつと高橋さんが元気な声で「いらっしやいませ」と出迎え、素敵な物語運びのお手伝いをしてくださることでしょう。

(きむら・かおり/日本語文化系二年生)



■取材中は笑顔が絶えませんでした。高橋さん、素敵なお話をありがとうございました!

につぼん丸で出雲大社へ

小泉 凡



■ (上) クルーズディレクターの鈴木則幸さんと。(下) 出雲大社沖に到着したにつぼん丸。

ングだ。それも乗客ではなく、むしろ乗組員の一人、出演者という立場での参加である。足かけ二泊三日の船旅の中で、出雲大社や遷宮、出雲神話や小泉八雲について語るといふ役割を命じられたからだ。

大棧橋は、外国航路の発着用棧橋として一八九四年にほぼその原型が完成している。現在に至るまで「みなと横浜の顔」で、当初はメリケン波止場と呼ばれていた。大正生まれの父は「メリケン棧橋」と呼び、決して大棧橋とは言わなかった。世田谷に住んでいた子ども頃、私は父に連れられて、週末にはたびたび大棧橋に客船見物に出かけていた。学生時代にはよくサイクリングでも訪れた。異国情緒と非日常が感じられる、もっとも身近な場所だった。

今回の旅は、その大棧橋から実際に出港することだけでもこの上なく心が躍った。

た。しかし、横浜駅の雑踏に巻き込まれ、到着が約束の時刻を過ぎてしまい、みなとみらい線の日本大通り駅からキャリアバッグを引いて大棧橋まで、思い出に浸る間もなく疾走する羽目になった。歩みを緩めることなく二万二四七二トンの「につぼん丸」に乗り込んだ。

船旅のはじまり

まずは、乗組員食堂での昼食。大半の乗組員がフィリピン人のため、日本食とフィリピン食の二種類が用意されている。好きなものを皿に盛りつけて腹ごしらえをする。とにかく急いで冷やし天ぷらうどんとサラダをかきこんだ。十四時、出港。甲板では「ヴォンヴォンジャー・セレモニー」が行われ、乗客たちはスパークリング・ワインを片手に非日常の世界への旅立ちを祝っていた。タグボートに引かれて移動する巨大な船体と見慣れたみなとみらいの風景に交互に視線を遣りながら、横浜に別れを告げる。

船内でのイベントはすべて「Port & Starboard」という船内紙で乗客に知らされる。さっそく新聞用の講演要旨を三十分ほどで書き、明日の講演のパワー

大棧橋

羽田から横浜に向かうリムジンバスがベイブリッジを渡りきると、みなとみらいのホテル群の手前に、クイーンエリザベスII世号を彷彿とさせる黒白のツートンに塗り替えられた客船につぼん丸の姿

がはつきりと見えた。その背後には、いっぴくなくクリアで美しい富士山の姿がぼんやり浮かんでいる。

これから一風変わった旅が始まる。出雲大社の平成の大遷宮にあわせた、横浜から出雲へのにつぼん丸によるクルージ



■(上) 横浜港を出港、5月7日 14:15 ごろ。(下) 船内には特製の注連縄が。

ポイントのデータをクルーズ・オフィスに届け打ち合わせを一時間ほどで済ませる。日が傾く頃から暗雲が空を覆い始める。伊豆半島沖にさしかかると、ついに雨が降り出した。少なくとも陸上の天気予報では雨の予報はなかった。次第にうねりも高くなった。そういえば、伊豆半島南部から伊豆諸島へかけては、ぬけるような青空が常の真冬の関東の中でも時に雨が降る海洋性の気候であることを思い出した。船が遠州灘に進んだ頃、乗客と同じメインダイニングで夕食をとった。さぞはかどるだろうと高をくくって持ち込んだ仕事は、エンジンによる小刻みな振動と大きくゆるやかな船のローリングで早々にあきらめ、生まれて初めてトラベルミンを飲み、ワインを一杯飲んで部屋に戻り床に就いた。

わたしのことを Disaster man(災害男)と呼んだのは島根大学で地球物理学を教えるニュージランド人の友人だ。自慢ではないが、いままで宮城県北部地震、福岡玄海島の地震、中越地震、ギリシャでの稀有な洪水、アメリカ・オハイオ州での豪雨や竜巻など、いくつかの自然災害を現地で体験した。二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件の際にも交換教員で渡米中だったし、二〇一〇年のアイスランドの火山噴火の際には、ロンドンに居て、ヒースロー空港閉鎖寸前に香港行きの飛行機に乗ることができた。この船旅でも早くも何かが起こりそうな予感が兆した。

ひと眠りした午前一時ごろ、凄まじい轟音と震動で目を覚ました。一瞬タイタニックの悪夢が過ったが、いくらなんでも氷山が熊野灘に浮かんでいるわけがない。船室のカーテンを開けて外を見ると、激しい風雨と白波が渦巻いていた。二万トン級の船でも、タイミング悪く高波を受けるとこんなに衝撃を受けるものかと驚いた。

瀬戸内海クルージングでの出会い

翌朝は打って変わって溢れる穏やかな朝の陽光が窓から差し込んできた。すでに紀伊半島沖を巡って大阪湾の紀淡海峡付近にさしかかっていた。九時二十八分に明石海峡大橋をくぐって瀬戸内海に入る。気温は次第に上昇し、海は鏡のように平らかに静まっていた。

十一時から、「小泉八雲と出雲神話」というテーマで一時間の講演を行った。八雲がニューヨークにいるときにチェンバレンの英訳「古事記」を読み、出雲神話に関心を寄せたことが日本行のきっかけとなったこと。「古事記」は横浜で購入して再度、脚注まで精読したこと。夢にまでみた出雲大社の訪問で内陣の昇殿を許され、巫女舞をみて古代ギリシャのシャーマンを思い出したこと。出雲神話をつねに世界の神話との比較の視野でみつめていたことなどを話した。

話し終えると、年輩の女性と娘さんと思われる二人が駆け寄ってこられた。小林佳子さんという昭和二年生まれの方で、私の祖父がわずかな期間、目黒区の八雲高等女学校で教鞭をとっていた時に国語を習ったという。「一雄先生は髑髏のついたステッキをつけていつも教室に

現れた。やさしくて話上手だったので、時々、怪談の語りをせがんだ。恥じらいをみせながらもその語りは堂に入っていた。「そのうち、親しくなると家にも遊びにいった。そうしたら、二歳年上の子どもがいて一緒に楽しく遊んだことが忘れられない」。まさにそれは一九二五年生まれの私の父のことだ。不思議な出会いもあるものかと思った。そういえば、晩年の父が「二雄おじいさんが若いころ、八雲高女の生徒さん達が遊びに来たことがあり、喜久恵おばあさんがやきもちを焼いて往生した」と言っていたのを思い出した。小林さんはきつとその生徒のひとりだったのだろう。

私の父は先祖譲りか、海が大好きで、一時期、三井船舶という会社で船乗りをしていた。現在のにつぼん丸を所有する商船三井客船株式会社は、一九六四年に



■来島海峡大橋を通過、5月8日 17:00 ごろ。

三井船舶と大阪商船が対等合併し大阪商船三井船舶を経て現在の社名となっている。つまり三井船舶はこの会社の片方のルートなのだ。そんなことを考えると、今回の乗船と小林さんとの出会いはあの世に居る父の魂がもたらしたできごとかと思いたくもなる。

横浜出港からほぼ二十四時間が経過した午後一時十九分、瀬戸大橋をくぐる。「こんな穏やかで澄み渡った瀬戸内海はめったにありませんよ」と久葉船長からアナウンスが入る。実に幸運だった。今治の町の全貌がはつきりと左手に姿を現し、午後四時五十一分、しまなみ海道の来島海峡大橋をくぐる。出航してからくぐった橋はこれで四本目。この橋だけが、底面が鉄骨むき出しではなく、コンクリートで覆われた白い橋だった。橋の底面を真下から眺めるといって醍醐味もクルージングならではだ。

八階だての船内の七階のデッキに上がり、心地よい潮風を浴びながら日が西へ傾くのを見守る。乗客のほとんどが六十年代から八十代の熟年カップルで嬉しそうにデッキで二日目の日没を見送っていた。日没は防予海峡で。

海のカ

夕食後、島田歌穂&島健夫妻のデュオコンサートを堪能した。漆黒の闇の中に街の灯が近づいているのを感じる。間もなく関門海峡だ。午後十一時四十三分に関門橋の下を通り、日本海へとまわり込

む。心なしか波も高くなり速力が上がる。夜のうちに一気に大社をめざすのだ。翌朝、六時に目が覚めた時、すでに正面に見慣れた三瓶山の姿があった。海流に乗れば、下関からわずか六時間余りで大田に着ける。現代のJ Rや高速道路と変わらぬ速さであることはある意味で恐るべきことだ。

古えの朝鮮半島からの渡来人や近世の北前船の繁栄が、きわめて自然に逆らわぬ現象だったことを体感したような気がした。瀬戸内海の風景と海の穏やかさは比類を見ないものの、島々にさえぎられて船の動きが制限されることを思えば、かえって日本海が交通路としては秀逸な利便性をもっていたのかもしれない。現在でも瀬戸内海航行中は速度が制限されていて(とくに備讃瀬戸は十二ノット)、船長は絶対に操舵室を離れてはいけないことになっている。船の行き来の多さ、島々の多さ、渦潮の危険性は、決して無視できる条件ではないようだ。

歴史学者の故網野善彦さんが、アジア大陸の東辺には、北からベーリング海、オホーツク海、日本海、東シナ海、南シナ海の五つの大きな内海が連なっていて、日本列島の社会を理解するためには少なくともそのくらいの広い視野をもって、海そのものの特質を十二分に視界に入れた「海の論理」で考えなければいけないと主張されていたことが、はじめて臨場感を伴って理解できた。

予定より一時間ほど早く、につぼん丸



■(上) 防予瀬戸の夕暮れ。(下) 上陸用ボートの準備作業、5月9日9:00ごろ。

は大社と日御崎の中間の沖合に錨をおろした。船に積んである上陸用のボートを海面までおろし、母船とボートの間に簡易栈橋を渡して、九時過ぎには第一便が大社漁港への上陸を開始する。その第一便の小舟に乗って横浜を出てから四十三時間ぶりに陸地を踏んだ。

船旅の終わりに

朝の出雲大社は驚くほど多くの参詣者で賑わっていた。大遷宮より一日前の平日だが、なにしろすごい人である。この船旅でも二百名の人たちが、横浜からにつぼん丸で大遷宮を前にした緊張感溢れる出雲大社を参拝に訪れたのだ。日本のレジャー旅行の起源が、古代貴族の寺社参詣の旅から始まったことを思い起こして、昔も今も、西洋からは不思議な無宗教人とみられる日本人が、実は根強く神社信仰を受け入れていることをあらた

めて感じた。

につぼん丸には二百数十名の乗組員がいる。つまり今回のクルーズでは、乗客より乗組員の方がやや多いのである。エントナーテインメント担当のMさんは海が大好きなことから、この仕事を選んだ。年間百日は海上で過ごせるし、乗船客との対話が幸せという。またツアーディレクターのFさんは年間二百日以上を海上で過ごすが、上陸のたびに接する地域の人々や風物への興味が尽きないという。レストランやバックヤードではおもにフィリピン国籍の人たちが黙々と仕事をこなしている。三日間で出会った乗組員はみんな笑顔だった。でも同時に、つねに「板子一枚下は地獄」という緊張感が、時にあらわす真剣な表情と敏速な身のこなしにあらわれていた。

(こいずみ・ぼん/総合文化学科教員*民俗学)

島根のかるたびと

福島瑞生



二〇一三年五月。島根県立大学短期大
学部総合文化学科では、かるた大会が行
われた。その時私は、初めて「競技かる
た」をしたが、これがとても楽しかった。
たしかに難しくはあるのだが、それ以上
に楽しい。これは面白いと心から思った。
そして、今回の取材もとても楽しく行う
ことができた。

二〇一三年七月二十日。私は古典の村
上先生と共に、バスで山陰中央ビルに向
かった。ビル五階の和室へ入ると、中
は高校生の姿もあり、さまざまな世代の
方がここに集まってかるたを楽しんでお
られる様子。今回は短大のかるた大会で
お世話になった松井小夜子先生に時間の
合間をぬってお話を伺った。

福島 かるたを始められて、今年で何年
目ですか。

松井 おおよそ、三五年だと思えます。

福島 かるたを始められたきっかけを教
えていただけますか？

松井 息子が小学校低学年の時に、学校
から「かるたくらいは小学校のころに覚
えてしましましょう」というプリント
を持ち帰ってきたんですよ。それで、た
また近くの公民館でNHKの福間将八
という方がかるたの講座を開いていると
いう噂を聞いて、覗いてみたんです。そ
したら、福間先生がいい声でへなにわづ
に……ってやられて、私その声を聞いて
鳥肌だったのよ。こんな緊張久しぶ
り！って。それで、覚え始めたの。私、
大阪の人でしたから歌に出てくる場所も
わかったし。

福島 なるほど。たしかにこのあたりの
歌というのはほとんどないですね。

松井 ここらでは隠岐くらいでしょうか？
それからしばらくすると、一緒にそこへ
通っていた皆さんがご主人の退職と同時
に、県外にある実家に戻ってしまわれて
ね。それで島根に残ったのが私一人とい
う感じ。おまけに福間先生は亡くなって
しまわれて。ということは、なんとなく

私がやめられないでしょ。こういう立場
になったらやめられないのよ。保育園で
教えて、小学校で教えて、中学・高校で
教えて、短大でしょ？（笑）そういう繋
がりがあつてね、ずっと続けてきたの。
福島 先生が続けてこられたおかげで、
今回私たちは貴重な体験をすることが出
来たので、とても感謝しています。

松井先生はかるたをされるだけでなく、
かるたに関する知識も豊富である。
松井先生は愛読書『百人一首の秘密 驚
異の歌織物』を開きながら解説をしてく
ださった。

松井 これ、へ来ぬ人を まつほの浦の
夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつ
つ。「来ぬ人」というのは「還つてこ
ない人」とって意味よ。これが、へ百敷ももひきや
古き軒端の しのぶにも なほあまりあ
る 昔なりけりへに繋がつてくるんだけ
ど、佐渡島に流されて還つてこない順徳



■学内で行われた「かるた大会」の様子。



■かるたについて語る松井小夜子先生。

院の歌なの。それで、これが次はへ人もをし 人も恨めし あちきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は。後鳥羽院ね。流されたの。で、これがへ玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの よわりもぞするゝにくるの。式子内親王ね。定家の恋人だったの。で、早死にしてあの世に行ってしまったの。そうすると還って来ないでしょ？

福島 なるほど！

松井 わかった？（笑）この還って来ない人を「ここで待っている」という歌なの。私これ見て感動して。定家がどうしてこういう歌を作ったのかという謎が解けた気がするの。

福島 私も今お話聞いてすごい鳥肌が立ちました！ 今まで「来ぬ人」っていうのは待っててもなかなか来ない人のことだと思っていました。

松井 だって島流しよ？ 後鳥羽院は隠岐で亡くなったのよ。順徳院は佐渡島よ。式子内親王は「あの世」よ。還って来な

いわよ。

福島 島流しは当時死刑と大差ありませんからね。

松井 そう。後鳥羽院は隠岐で「帰りたいたい、帰りたい」と言っていたけれど、それが置き文になって。もう呪いね。それを見た都の人たちは怖くなったわけ。その当時は天変地異が沢山あって、後鳥羽院の呪いじゃないかっていう考えもあったの。都の人は怖がってた。これは私の推測だけれど、定家も怖かったんだと思うわ。それで、「どうぞ穏やかに」という思いをこめてこの歌を作ったんじゃないかと、著者も言うし、私もそれに同意するの。

ただのゲームだとしか思わなかった百人一首にここまで深い意味がこめられている事実には衝撃を受けた。

福島 競技かるたには基本的にA〜F級までしかないということなんですけれど

も、中には「G級」というものもあるんですが、これは一体どういうものなのでしょう？

松井 Gは、「GOOD」とか、もっと高いレベル。クイーン経験者とか選手権経験者とか。日本で何人かしかいないの。普通はないのよ。

福島 それでは基本的にはA〜F級ということですか？

松井 そうね。四段以上が「A」です。**福島** 読み手の方も同じなのでしょう？

松井 いえ、今のは選手の話。読み手はまた違うのよ。読み手には「専任読手」と「公認読手」とがあって、その「公認読手」の中に「A級公認」と「B級公認」がつくってあるんです。

福島 A級公認？

松井 「A級公認」っていうのは、A級の選手がいるところで読んでいいですっていうこと。「B級公認」っていうのは、B・C・D級の選手のところを読んでいいですっていう意味です。それで、試験がありますね。B級公認の中からA級公認になりたい人が試験を受けて、年に一人か二人がA級に合格っていうくらいすごく難しいです。おまけに段も「三段以上持っているなきゃだめ」という決まりがあるんですよ。ただし、段は「推薦段」が貰えるのね。

福島 推薦段ですか？

松井 推薦入学みたいなものよ。本当に段を取ろうと思ったら全国大会に行か

なくてはならないんだけど。絶対取れませんよ。我々レベルでは。京大生や東大生の男の子の速さを見てくださいよ。ねえ？

福島 見てもいないのに大体想像つきますね（笑）。

松井 高校生でも結構取りますからね。それで私は公認読手のA級をいただいています。段は、なんていうの？ 名譽段と言ふのかな。六段は持たされています。

福島 島根県かるた協会に所属されて、島根県のかるたに大変貢献されたって伺っておりますけれども、今までやってきたことで一番大変だったこと、もしくは喜びのエピソードなどありましたら教えてください。

松井 「続ける」ってことですね。継続は力なり、かな。小学生の時教室に通っておられた方もいるんですけど。二〇年後にインターネットでこの教室のことを知って、ちよつと来て見たら、あのときと同じ人が同じところに座ってたって。

福島 素敵ですね！

松井 それで「その時も同じ服だったでしょ？」って大笑いしたんですけどね（笑）。そのくらい続けるってことが大事。だから私がいつも同じ場所に座ってるってことが大事なんじゃないかなって思うんです。そうすればみんな安心して来てくれるのね。

この話をされたときの松井先生の暖かい表情は印象的だった。同じ人が同じと

ころにいるっていうのは、改めて素敵なことなのだと感じることができた。

松井 喜びのエピソードもあるのよ。ちよつと威張りたいの(笑)。取りの方は私自身が大了た取り手じゃないから、あんまり指導できないんだけど。でも私にすればもつと楽しみがあるわけ。「読



み手」ね。高文祭、今年は長崎であるの。体育館でもすごい数の学生がかかるたをするんだけど、読むのも学生なの。

福島 高文祭ってかるたもあるんですか？

松井 あるんですよ。で、その読み手は全国で三人が選ばれるんだけど。(過去の出場者の資料をみせて) これ、北高生。



それで、今度も長崎の高文祭に行く子がいるんだけど、私はどうしてもこの子を一位にしてやりたいのよ。ただこの子はお勉強もトップクラスで、教室に行く時間がないの。だから学校とかでストップウォッチもつてやってるのよ。私の自慢はこれね。ここまでの生徒さんをこまでの成績にしたってこと。

福島 先生の今、またはこれからの夢はなんですか？

松井 近い将来でいえば、高文祭で読み手の子を優勝させることね。

平成二十二年三月に島根県立大学短期大 学部をご卒業された石川亜希子さんにもお話を伺った。

福島 石川さんのこれからの目標はなんですか？

石川 松井先生のように、年をとつても、取り手であれ、読み手としてであれ、教える身であれ、何かしらの形でかるたはずつと関わって生きたいと思っ

ている。現在、石川さんは司書として活躍されている。

松江北高生の皆さんにもお話を伺った。誰もがかるたを始めたころ一番苦労したのはやはり札を覚えることだったと思う。中でも同じ言葉がある札を覚えることが一番大変だったと全員が口をそろえて言う。

三年生でかるた部の井上真子さんは、高校に入ってからかるたを始めたと言

福島 きっかけはなんでしたか？

井上 友達がかかるた部に入ると言ったので。じゃあ一緒に入ろう、と言う感じですね。

福島 今は取り手として上達を目指しているのですか？

井上 そうですね。

福島 読み手として頑張ってみようと思っただけではありませんか？

井上 そうですね(笑)。なかなか難しいので。取り手としてやっていると、今の読みはどうだったかかっていうのを考えるので。自分が読み手になったとき、取り手の気持ちに答えられる読みが出来ると思えないので……。

高校生とは思えないしつかりとした返答に驚かされた。井上さんは高校三年生になった今も大会に向けて練習を重ねている。

かるたを語るときの大人びた表情とは違い、得意科目は英語であったり、理科で酷い点をとつたなど、年相応な高校生らしい表情も見ることができた。

このほか沢山の良いお話を聞かせていただいたが全部紹介できないのが残念でならない。ただ、かるたの話をする人は年齢問わずかつこよかった。(ふくしま・みずき/日本語文化系一年生)

商店探訪

8

松江に残る 古き良き貸本屋

三浦佑香・三島悠希

さくら文庫・かっぱ書房



現在は、昔ながらの貸本屋さん是全国的に見ても少なくなってきました。最盛期の一九六〇年代には、松江市内だけで二十店以上あった貸本屋さんも、今では二店残っているだけです。もう常連さんしか知らない、そんな貸本さんの魅力をもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思い、今回『のんびり雲』の取材先として選びました。

私(三島)が貸本屋と出会ったのは、二〇一三年三月のことでした。アパートから駅に向かう途中、偶然「貸本さくら文庫」を見つけたのです。しかもそれだけでなく、その先には「貸本かっぱ書房」という別の貸本屋もあるではないですか。

漫画好きの私は、『金魚屋古書店』(芳崎せいむ)という漫画に出てくる、「ね

こたま堂」という貸本屋を知ってはいませんでした。しかし、現実の貸本屋に出会えるとは思っていませんでした。しかも、同じ雑賀町内に二店もあるとは！ 松江の町が、グッと身近になりました。

二〇一三年五月、私はその日初めてさくら文庫を訪れました。貸本屋を利用したことがなかったので、なかなか店に入る勇気が起こらなかったのです。そのため、店をみつけてから二カ月も経ってしまいました。

そんな三島さんから貸本屋のことを聞いた私(三浦)は、六月一日、三島さんに頼んで一緒に連れて行ってもらいました。かっぱ書房では、雑誌の多さに目を奪われました。さくら文庫では、一度に見切れないほどの漫画の量に圧倒されました。同じ貸本屋でもそれぞれ特徴があ

り、私はまた来たいと思いました。
そして六月十五日、私たち二人は、改めて「さくら文庫」と「かつば書房」を訪れました。

かつば書房

国道九号線の相生町交差点から、九号線沿いに西へ約三〇メートル進むと、南側にかつば書房があります。年季が入った看板やガラスの引き戸、そして手書きのお店紹介。どれもレトロな雰囲気です。

店内では、ベレー帽をかぶってメガネをかけた、いかにも漫画を描きそうな方が出迎えてくれました。店主の黒田孝さん、昭和四年生まれの八十三歳です。

店内を見回すと、カウンターが店の東側にあります。壁は四面ともすべて本棚で、カウンターの後ろの壁と店の南側の壁は漫画のコーナーになっています。店の中央部には本棚が四列、少し間隔を開けて置いてあり、ここにも漫画が並べてあります。

店の西側の壁面は、雑誌のコーナーになっています。雑誌はすべて面出しして並べられていて、どんな雑誌があるのかが一目で分かるようになっていています。女性向けの雑誌が多く、華やかです。

小説などの単行本、つまり漫画と雑誌以外の本は、カウンター後ろの一番北にある本棚にまとめてあります。そこには、村上春樹や宮部みゆきなど、最近話題の小説が網羅されているだけでなく、出雲や松江について書かれた本も何冊かあります。お客さんが読みたい本のエッセンスが凝縮されているようで、ピンと張りつめた緊張感を感じました。

本好きが高じて始めたかつば書房も、今年で約四十五年（はつきりとした年数は覚えていない）そうです。店の名前の由来は、一九六〇年代に急成長していた「カッパ・ブックス」から取ったそうです。「口に出しやすいから広まりやすい」と話しておられました。

始めた当初は、老若男女を問わず誰でも店に来て、多い時は一日で三百冊貸出したこともありました。しかし、一九八六年に松江市立図書館ができてからは、小説などの単行本があまり出なくなりまりました。

「もう貸本屋はダメかな……」と思っていた時、国道九号線の拡張にともなってお店は今の場所に移動しました。一九八〇年代から

一九九〇年代には再び漫画ブームが到来し、かつば書房はまた繁盛し始めたそうです。

さくら文庫

国道九号線の相生町交差点から、今度国道四三二号線を南へ約三百メートル進むと、西側にさくら文庫が見えてきます。道路の反対側には、雑賀小学校と雑賀公民館があります。

店内に入ってみると、壁は全面が本棚になっています。店の中央にも、人が一人通れるほどの間隔を空けて本棚が並び、ちりと詰まっています。古いお店だから古い漫画本ばかりだろうと思つていましたが、そんなことはありません。今日発売された週刊誌から最新の漫画本や話題作まで揃っています。

さくら文庫は約五十年前に先代の山下



■ (右下) 本がばらけないようにホッチキスで留めているところ。(左) かつば書房のご主人。



■ (上) かつば書房で見せていただいた『トハン週報』(下) かつば書房の小説棚の一部。



■ (左上) かつば書房の帳簿。

竹久さんが始められました。現在は二代目、山下邦男さんと和子さんご夫妻が店を引き継いでおられます。邦男さんは、五十四歳の時に店を継ぎましたが、それまでの約二十年間、新幹線の運転士をしていました。その頃はずっと単身赴任で、貸本屋を継いでからやっと夫婦一緒に暮らせるようになったそうです。

本ならだいたい四十円で借りることができま。お金も本の置き場もない学生には嬉しいかぎりです。しかし、二日以上同じ本を借りると延滞料金が掛かります。かつば書房では、一日延滞するごとに小説は十円、漫画は安いものでも二十円かかります。さくら文庫では、先代の時には一日二十円でしたが、現在は十円に値下げしています。ちなみに、店の定休日には延滞料金は掛

ていました。店を継ぐときには和子さんが仕事を邦男さんに教えたそうです。現在、開店時間の十二時から十七時頃まで和子さんが店番をし、その後、閉店時間まで邦男さんが店番をしています。和子さんは「お客さんと話すのが楽しい」と言っておられました。

貸本屋さんのルール

初めて本を借りるときには、かつば書房もさくら文庫も同様ですが、学生証など住所を確認できるものを持って行って、帳簿に登録してもらいます。一度顔を覚えてもらえば、その次からは顔パスで借りることができます。料金設定は、その本を十人が借りたら元がとれるようになっていそうです。定価千円の雑誌は百円、漫画の単行

かりません。ということ、土曜日に借りて月曜日に返すと、一日分の料金で二日借りることができるのです。

貸本屋の本を手にとってみると、図書館の本のようにどれもカバーがしてあります。人気作は特に多くの人たちの手に触れるため、ページがバラバラにならないように補強しています。

かつば書房では、漫画や雑誌を補強するためにホッチキスで留めています。『少年ジャンプ』のようにぶ厚い本は、ドリルで穴を開けてからビニール紐を通して補強しているそうです。さくら文庫では、すべての本にドリルで二カ所穴を開けてから、ビニール紐で補強しています。

かつば書房もさくら文庫も、ナイロンで表紙を保護しています。さくら文庫では、漫画本についている帯もなるべくそのままつけています。そのおかげで、年月を経ても表紙が傷まず、状態のよい本を提供することができるのです。

貸本屋では、誰にいつどの本を貸したのかが分かるように、帳簿をつけています。基本的には、日付、借りた人の名前、借りた本の名前(または本の番号)が記されています。しかし、貸本屋によって独自の工夫やこだわりがありました。

さくら文庫では、雑誌は「い」の何番、漫画は「ろ」の何番というように、雑誌と漫画を分類して番号を付けています。帳簿には、一日ごとに客の名前と借

りた本の番号が書かれていて、貸出日数はページをめくって数えるそうです。

かつば書房では、帳簿の上の方に横長の紙が貼ってあります。その紙の上段には十日前までの日にちが、下段には貸出日数を示す一から十までの数字が書かれています。本を貸し出すとき、裏表紙の内側に貼ったメモ用紙に、日付と通し番号を組み合わせた五桁の数字を、連番スタンプで印字していきます。返却時に連番の上二桁をこの紙で探すと、貸出日数が簡単に分かるようになっていきます。

かつば書房もさくら文庫も独自の工夫をしながら手書きのノートを使い続けていて、店のこだわりと歴史を感じました。



■ さくら文庫の
ご主人と奥さん。

かつば書房
営業時間 12時～21時
定休日 月曜日
駐車場あり
島根県松江市雑賀町 242
Tel.0852-21-7481
さくら文庫
営業時間 12時～22時
定休日 日曜日、祭日
駐車場あり
島根県松江市雑賀町 680
Tel.0852-26-0068

本選びが肝心

お客さんに本を借りてもらうことが本業の要ですが、貸本屋さんはその本を書店から仕入れています。しかし、単行本や雑誌は毎月膨大な冊数が出版されます。貸本屋さんは、その中から借りてもらえそうな本を選んで、いち早く店頭に並べているのです。

さくら文庫では、書店から届く新刊本のリストから仕入れる本を決めています。しかし、そのリストに載っていない漫画も多いので、ネットで話題の漫画を調べたり、お客さんの注文に対応したりしているそうです。

かつば書房の黒田さんは、「これを隅から隅まで読んで仕入れる本を決めている」と言いながら、『トーハン週報』という冊子を見せてくださいました。「単行本はベストセラーを中心に選ぶけど、漫画は売れ筋が分かりにくい」そうです。この冊子には、漫画を含めた単行本や雑誌の、近刊情報やベストセラー情報などが載っていました。

「お客さんの要望は取り入れられないんですか？」と黒田さんに尋ねてみると、「仕

入れる本は基本的に自分で決めている。お客さんの要望は断片的だし、個人の好みがあるからね」と教えてくださいました。貸本屋さんは、自分好みの本ばかり仕入れても、お客さんの要望ばかり取り入れていけないのですね。

お客さんたちに愛されて

面白いことに、さくら文庫では少女漫画が人気ですが、かつば書房では少女漫画を借りる人はあまりいないそうです。逆に、かつば書房では週刊雑誌が人気ですが、さくら文庫では少ないそうです。お互いの得意分野が被らないからこそ、二店が共存しているのです。

かつば書房もさくら文庫も、どちらも昔からの常連客がほとんどです。しかし客層は少し違っていて、さくら文庫は女性客が多いようですが、かつば書房は男性も女性も来るそうです。どちらも昔はもつと子どもが多かったのですが、今では子どもはほとんど来ないそうです。お

そらく、ゲームや活字離れが原因ではないかとおっしゃっていました。

ある時、「年末には息子が帰ってくるからこの漫画を置いて」と、県外に出ているお客さんのお母さんから電話がかかってきたそうです。また、宅急便で借りた本を返してくる、遠方のお客さんもいるそうです。遠くからでもまた来て本を借りたいという、根強いファンがいるのですね。

今では全国的にも数少なくなった貸本屋が、松江市には二店も残っています。店の本には、万引き防止のタグも付けられています。わずかですが、借りたまま返さない人もいます。それでも商売が成り立っているのは、貸本屋さんはお客さんを信頼し、お客さんたちはその信頼に応えているからです。昭和の時代の良き日本が、立ち上ってきます。

図書館や漫画喫茶、大型のレンタルショップなどが普及してからは、一日の

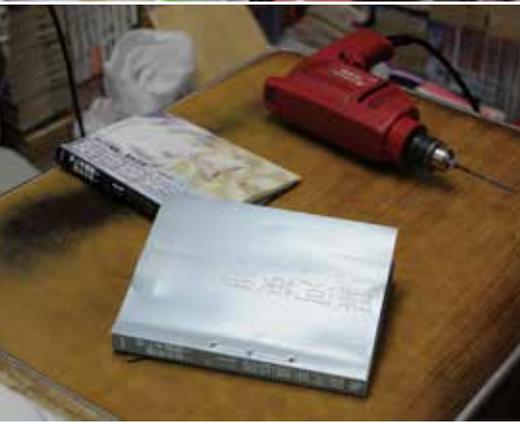
貸出数は五十〜六十冊ぐらいに減っています。いろいろな原因が考えられますが、貸本屋を知る人が少なくなっていることが大きいのではないのでしょうか。

さくら文庫の魅力を、皆さんにコツンリお教えしましょう。ここは、島根における「漫画の聖地」です。先代の時代から集め続けた漫画は数知れず、店の二階にも、漫画の歴史を語る貴重な本が皆さんを待っています。

かつば書房は、今は週刊誌に力を入れています。漫画から小説まで、本の品揃えにはスキがありません。皆さんの要望も、きつと聞き入れてくださるはずです。自分専用の書庫として利用することをお勧めします。

初めて入るには少し勇気がいるかもしれませんが、ぜひ一步を踏み入れてみてください。皆さんの世界が広がること請け合いです！

(みうら・ゆか／日本語文化系一年生)
(みしま・ゆうき／日本語文化系一年生)



■ (上) 2階の古漫画。(下) ドリルで穴をあけ、ビニールひもで本がばらけないようにしているところ。



objects 水辺の器屋

(松江市)

村上桃子

「生まれも育ちも埼玉」であった創さんは、小さな頃から、今は亡き父の里帰りの際に松江をたびたび訪れていた。その時にも、他の建物とは明らかに異なるこのお店の外観を見て、かつこい建物だと感じていたという。「もちろん将来、自分がここでお店をするとは思ってもよくなかったのですが」と創さんは言った。

もともとここは大陸との貿易をおこなう商社、山陰道産業株式会社建物であった。そして生命保険会社、船会社と入り、一九七三年にトラヤ紳士服店が購入した。

この建物の大家さんにもお話を伺うと、トラヤの店主の方はこだわりの強い方で、店舗の内装にも非常にお金をかけたそう。お店はそこで約三十年続き、現在から十年ほど前に閉じられた。

こだわりの人が選んだのがこの建物だというのはいずれも。紳士服という洋品を売る店として、この建物は存分に力を発揮しただろう。そして次のこだわりの人である創さんが、ここを選んだのだった。

創さんは、二〇〇六年からインターネットで自身が買い付けた工芸品を販売している。「三十歳までにはお店を持ちたい」と考え、埼玉で店舗用の物件を探



していた。しかし、どれもしつくりくる物件がなかったそう。

その中で、旧トラヤ紳士服の建物が空いていることを聞く。「あのトラヤが空だ」。工芸品を売る店舗として使わせてもらえるかを聞いたところ、OKが出た。「この建物があつたから、ここでお店をひらいたんです」と創さんは言った。

父の故郷ではあっても、埼玉から島根にはるばる移住するのは覚悟を要しただろう。すべてはこの歴史が詰まった建物が存在したからなのだ。山陰道産業、ト

山陰には多くの窯元がある。ここに来て驚いたのは、人々がごく日常的にそこを訪れ、生活の中に自然に焼き物を取り入れていることだ。土地でつくられたものと一緒に生きている。そうした生活の光景を目のあたりにして、こちらに来てからというものの、私の食器棚には、山陰でつくられた器がひとつずつ増えていった。

ある雨の休日、このお店を訪れた。大橋を渡り川沿いに歩くと、もともと紳士服店であったという洋風の建造物がある。傘をたたんで中に入ると、天気の色

いで薄暗い店内には、きれいにライトがあてられた器が鈍い光を放っていた。窓の外をみると、川が静かにさざ波立ち、風に枝垂れ柳が揺れている。

こんなきれいなお店があるなんて、と改めて以来、ときどき来ては器を買って帰る。取材の日はうって変わって、日射しの照りつける真夏日だった。

トラヤ紳士服

佐々木創^{はじめ}さんが、オブジェクツという工芸品を扱うお店を松江にひらいたのは、二〇一一年の四月である。

ラヤ紳士服、そしてオブジェクツ。時代ごとにその表情は変わっていくけれども、約八十年前の建物をもつ力をそこに感じた。

沖縄での出会い

大学時代の音楽サークル仲間と沖縄へ

行き、偶然ある店で焼き物を見たとき、「かっこいいな」と思った。それが創さんの工藝との出会いだ。「その焼き物を買って帰っても来なかったのですが、あとで『あれ、かっこよかったな』と思って、焼き物について調べはじめました」。英米文学を学ぶ中、大学教育に腹が立

つことも多かったという。たとえば、入学してABCの勉強からスタートさせられること。単位を認定するために出席が求められること——それを理不尽だと感じた。

ちょうど工藝に出会ったことで、大学をやめる理由ができた。「そんなことやつてるぐらいだったら、自分がビツとくるものに時間をつかいたい」と、三年生になるタイミングで中途退学した。

周囲からはもちろん、卒業してからでも遅くはないと引きとめられた。しかし、「大学を卒業すればそのまま企業へ就職するような、周りと同じ道に行くような気がした。けれども工藝に携わりたいたいと思ってからは、自分一人で責任をもって勝負していきたいと考えるようになっていった」という。そこには、父が自営業をされていたことも影響があったそう。

父が窯業の盛んな松江出身であるならば、沖縄で工藝に出会われたとはいえず、もともと家族で工藝が好きであるとか、そういったことを予想していた。しかし佐々木家の中で創さんは「突然変異」的な存在で、家族の中でひとりだけ工藝に目覚めたのだという。逆に、そうした創さんの姿を見て、家族もまた工藝を好きになったそう。

ものの「かっこいい」

工藝品の良さとはどこにあるのだろうか？ ことばにするのは難しい。創さんは「それぞれいい。自分がいいと思うも

のであり、直感的なもの。僕はへ存在感ということばを使っています。奥様の陽子さんは、「こんなにいいものが、手に届く値段で、身近に使えること」。

品物について語るとき、創さんも陽子さんも、しばしば「かっこいい」ということばで表現される。それは、本当にそのことばでしか表すことができないのだと思う。「格好がよい」という言葉は、他より優れていることではなくて、その場にじっくりとあてはまっているような、ちょうど良さを意味している。一個の「もの」として完成されていること。それが「かっこいい」なのだ。

「オブジェクツ」という店の名前にこめられた意味についてもうかがった。「自分が扱うものは、いわゆる「民藝」と呼ばれることが多いです。けれども、それに縛られることはないと思って。それなら「もの」でいいやって、そうした「もの」がたくさんあるから「オブジェクツ」にしました。このお店で取り扱っているものは「民藝」だけではなくて、要するに自分が好きな「もの」を集めて並べているだけなんです」。

好きなことと、それを職業にすることとは、また違う。それについても訊ねてみた。

「最初は、漠然とこういうものに携わりたいと思っていました。でも、いざ自分の立ち位置について、へつくる側へと売る側へ、どちらに立つのかを考えました。僕は器用ではありませんから、最初に沖



■ (右上) 現在でも残るトラヤの看板。(右下) 佐々木さん夫妻。すてきなお二人です。



縄で出会った時のように、誰かに『紹介したい』と思ったんです」。今でこそメディアで注目され、工藝はインテリアのひとつとして生活の中に取り入れられている。隙のない大量生産品

としての器から、「いびつさ」が絶妙なバランスで成り立つ工藝品へ。心にしっくりくる器をひとつひとつ選ぶ人は、現在確実に増えているだろう。ただ、今から十年以上前にそうした意

識はまだ世の中では薄く、こうした趣味を「渋い」の一言で片付けられることも多かったという。そうした中で、「自分がじっくりくるもの」に従ってここまで来られた佐々木さんの心の強靱さに、感じ入った。

夫婦いっしょに

お店を始めてからの苦労話をお願いすると、佐々木さんは「ほぼ苦労ですね」と突っつた。「僕もかみさんも、物販の仕事に携わったことがないんです。やったことのないことをやりはじめているので、全部がずつと手探り状態です。儲からないです。でも、楽しいです」。

取材の日、奥様の陽子さんは不在ということだったので、陽子さんについてもうかがった。お二人の好みはよく似ているようで、初めて見たものでも、同じものに反応するのだという。

陽子さんから影響を受けた部分を訊くと、「使い方ですね。料理で使ったり、花を生けたりすると、器が生き生きしますから。逆に僕がいかにかこういうものを「もの」として見て、そこで完結してるかっていうことがわかりますね」

一週間後、再度お店にうかがうと、創さんと陽子さんお二人で迎えてくださいました。創さんはたくましく揺るぎのない信念の人であり、奥様の陽子さんは、目鼻立ちの美しい太陽のような人である。

陽子さんが工藝に出会われたきっかけは、創さんの影響だという。ただ、陽子

さんの母は絵を描くそうで、もともと芸術を身近に感じていた。工藝にはまる創さんを見て、「すぐ飽きるのではないか」と思ったそうだ。しかしいつの間にか二人で工藝への情熱を共有され、生業にするまでに至っている。

お店を経営する中、創さんはお店のブレンとして対外的な役割を担っており、商品のラインナップを決める。陽子さんは、創さんがそうしたことに集中できるよう、実務的な面——値段をつけたり、ディスプレイをしたり——を担っているそうだ。

山陰との不思議なつながり

突然変異的に工藝に目覚めたにしても、創さんと山陰の不思議な縁を思わずにはいられない。創さんが特に影響を受けたという河井寛次郎は安来出身であり、河井が通った松江中学校はのち松江北高等学校となつて、創さんの父が通った。創さんが松江に来られたきっかけのひとつとして、父親の死ということも大きかったそうだ。

松江にお店を開いたことで、「窯元をめぐって来られる方が多い。興味をもった人が来てくれる」という。オブジェクツには、佐々木さんご夫妻のレンズを通して選ばれ、買付けされた品々が並ぶため、窯元めぐりとはまた違った刺激がある。陳列されるのは山陰のものだけではなく、滋賀、兵庫、広島、沖縄など各地に住む作り手の作品だ。

最後に、これから取り組みたいことについて訊ねた。「このお店はまだ三年目で、赤ちゃんのようなものなんです。企画展や個展をするのに適切な、自分たちの力量に合ったペースを見つけて、自分たちにやれることを、地に足をつけて、ちゃんとやることです。それから、今後取り組みたいことを考えます」。

レリーフの謎

佐々木さんご夫婦のお話を聞いているうちに、この建物についても惹かれ、その歴史を知りたいと思った。調べると、完成は一九三二年、設計は成田光二郎（二八九二―一九七〇）である。

この成田光二郎氏のことを調べるにあたって、成田建築設計事務所の成田光男さん（光二郎氏の孫、建築家）にお話をうかがった。光男さんが十八歳の時に光二郎氏は亡くなられたが、光二郎氏の妻つまり光男さんの祖母は百歳近く生きたそうで、光二郎氏のことは多く祖母から

話を聞いたそうだ。

成田氏の活動時期は明治から戦前にかけての三十年間で、五、六十件ののぼり、和風、洋風建築ともに手がけた。

現存する建物は、和風建築として山常楼（安来市）、天神橋南詰たてまち（松江市）、洋風建築として横田相愛教会（横田町）、旧千原医院（仁多町）などを設計している。また現存しないが、銀扇という料亭（松江市）も同様だ。

さらに一篇の論文からわかったことは、成田氏はもともと石工で、日清戦争あるいは日露戦争に従事した際、現地の建築に心を打たれ、建築を志すようになったということだ。

洋風建築の壁にはレリーフが刻み込まれ、何か強烈なメッセージを発しているようにみえる。今ではその意味がわかる人は誰もいない。

レリーフは全部で八枚、縦に並んでいる。石材は来待石、田中という石工が造ったという。いずれも裸の小さな子どもが

描かれ、可愛らしいというよりは少し怖い絵だ。

八枚のレリーフといえば、最近一九一四年の建設当初に近い様子が復元された東京駅のドーム部分の八本柱に刻まれたレリーフを思い出した。八枚は十二支のうち、それぞれの方角に合わせて丑・寅、辰・巳、未・申、戌・亥が選ばれている。

トラヤのレリーフにある動物は羊と猿だ。この建物の建築年である一九三二年の干支を調べると、一九三二年が未年の羊と猿は、この建物が一九三二年から一九三二年にかけてつくられたことを示すのかもしれない。ただ、その他の子供や葡萄のモチーフはわからなかった。

けれども、ここでまったく思いもよらなかった出会いもあった。茶目つ気たつぷりの大家さんは、ギリシャ神話や旧約聖書の世界をもとに、双子の絵には「カインとアベル」、葡萄の絵には「パツカス」というように、

レリーフのひとつひとつに名前をつけているそうだ。

出雲神話を観光資源とする島根にあつてこの絵はとも新鮮で、少し異なる空気を感ぜさせてくれる。「このレリーフがあつて本当に良

かつた」と大家さんは言う。

画家でもある大家さんは、題材がないときはこのレリーフをスケッチするそうだ。そうしてできた油絵を見せていた。扉を開くと、そこには何枚もの絵が飾られ、絵には、レリーフに描かれた子供が生き生きと、踊るように描かれていることに驚いた。「いつもあそこに閉じ込められているから、時々出してあげなきゃね」と大家さんは言った。

レリーフの意味は、最終的には設計者にしかわからないだろう。しかし、彼が建築にひとつの余分としての装飾を施したことで、それを見た人は魅了され、想像する。この不思議で素敵な建物が、いつまでもここに在りつづけてほしいと思つた。

（むらかみ・ももこ／総合文化学科教員＊上代文学、神話）

注

- （1）成田光男氏のお話による。
- （2）銀扇は現在の東急インの場所。
- （3）藤木竜也・和田嘉寿「島根県奥出雲町・旧千原医院の建物について」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』二〇一〇年九月

*取材にあたり、佐々木創氏、佐々木陽子氏、成田光男氏（成田建築設計事務所）、舟木由香氏（松江まちづくり塾）はじめとする多くの方の協力を得ました。心より感謝申し上げます。



■（上）トラヤのレリーフ。（下）東京駅のレリーフ。緑の円の中に干支が描かれている。